「学ばせ方改革通信　第5号　No.1」

令和4年１２月２２日発行
学ばせ方改革委員会

皆さん、こんにちは！ 今号では、研究授業と相互授業参観期間に行われた検証授業について特集します。

研究授業や相互授業参観は、どこの学校でも実施されている取組だと思いますが、本校の特徴は、全教員が授業検証シートを作成して授業をし、振り返りまで行うという点にあります。

そもそも、組織的な授業改善のためには、

① 目標・ビジョンを共有した上で、共通の指針を設け、授業を構築していくこと。
② 共通の指針を参考にしながらも、教員が個々に創意工夫していくこと。
③ 実践の成果を検証する仕組みを設けること。

が必要であると言われています。本校では、これら3点をふまえた取組の一つとして相互授業参観を位置付けています。準備は大変ですが、一年に一度、自分の授業を見つめ直すよい機会と捉えていただけるとありがたいです。

それでは、まず初めに研究授業の内容をご紹介します。本年度は中堅教諭等資質向上研修の一環として、国語科・英語科から２名の先生が研究授業をなさいました。

国語科

Q. 授業の概要を教えてください。

２年５組の「現代文Ｂ」の時間において『手の変幻』を教材として授業を行いました。「筆者の考えを多面的に捉える」ことを単元の目標に据え、「①筆者の主張や考えを振り返り、②それを用いながら問いの答えを考え、発表する」という手立てのもとに授業を進めました。

まずは本文を読解して「ミロのビーナスは両腕が失われているからこそ魅惑的である」、「手の欠落によって逆に可能なあらゆる手への夢を奏でる」という筆者の主張をつかませました。

次に、他の文章との読み比べを通して教材文での筆者の主張との相違点を考えさせ、筆者の主張を多面的に捉えさせました。発表の際には、ＩＣＴを活用し、各グループの考えをChromebookで記述させ、電子黒板に投影させて発表させました。

Q. 今回の「深い学び」に導くための問いはどのようなものでしたか。

『手の変幻』を読んだ後さらに文章ⅠとⅡを読んだある生徒から「龍安寺の石庭」も「ミロのビーナス」と同じだと思うのですがどうでしょうか」という質問が出た。あなたはどのように答えるか。筆者の立場を踏まえて説明せよ。

Q. 協議会ではどのような意見が出ましたか。

- 教材文とともに提示していた比較資料は参考になった。教員自身で探し出し、必要箇所を切り取るという作業は大変だが、授業の質や指導力を向上させるのに有効である。
- 生徒の考えの扱い方、広げ方には難しい点があるが、そこが教員の腕の見せ所であり、これからも考え続けていかなければならない。
- 生徒の考えを電子黒板で提示させる際に、答えを１つずつしか提示できなかったため、他の考えとの比較がしにくかったのではないか。
- Chromebook や電子黒板を授業でどのように活用するかの一つの方法を知ることができた。
- Chromebook や電子黒板を用いることのメリットとデメリット、効果的な場面や使用方法について。

Q.授業を終えてみてどうでしたか。

授業の中心となる「問い」の立て方、読み比べをする文章の選別や切り取り方や授業構想を練るのに時間を要しましたが、こちらが想定する以上に生徒は熱心に取り組んでくれました。教員が授業構想をしっかりと練り、授業準備にしっかりと時間をかけるという、教員として当然のことがいかに重要かを再認識する機会となりました。

また、ＩＣＴの活用については日々模索しているところですが、実際に活用してみることでメリットやデメリット、活用しやすい場面、しにくい場面が見えてくるため、今後もＩＣＴを活用した授業作りを進めていきたいと思っています。

英語科

Q. 授業の概要を教えてください。

２年５組コミュニケーション英語Ⅱの授業において、学んだ譲歩の表現を使用し、手書きとタイピングどちらが良いかについて、ミニディベートをするという授業を試みました。

まず、９月～１０月にかけて、教科書のLesson4 Handwriting in the Digital Age「タイピングが当たり前になっている時代だからこその手書きの良さとは何なのか」についての文章読解を行いました。この文章の結論は、手書きとタイピングの二項対立で考えるのではなく場面や状況によって２つを使い分けようという提案で終わっています。

次に、授業において、リスニング活動により本文の復習を行った後に、「一人一台端末の配備でChromebookが配付されるが、英語表現Ⅱで課しているessay writingを書く際にどんな手段を選ぶか」という場面設定を提示しました。その上で「手書きが良いか、タイピングが良いか」というトピックで、グループでミニディベートを行わせました。ディベートに入る前には、相手の意見を尊重する表現ということで、“Certainly～. However….”や“Indeed , ～ , but….”などの譲歩の表現を活用するという条件も課しました。

Q. 今回の「深い学び」に導くための問いはどのようなものでしたか。

“Which is a better way in essay wring, handwriting or typing?”

Q. 協議会ではどのような意見が出ましたか。

- スピーキングの指導の際に「相手の意見を繰り返す」のは良い案だと思う。
- 言いたいことを言えない生徒もいたようだ。1st ラウンドの後に、全員で表現を共有する時間を設けてもよかったのでは。
- 抽出生徒に皆の前でディベートさせると、生徒も参考になってよかったと思う。
- グループのメンバーを入れ替えるのも刺激になってよかったと思う。
- パフォーマンステストで評価とのことだか、実施の仕方がなかなか難しいのでは。待機の生徒が自習になるのは避けたい。
- スピーキングに力を入れると進度が遅くなるとのことで、考査の範囲が必然的に狭くなるのではないか。

Q.授業を終えてみてどうでしたか。

ミニディベートは私自身初めての授業で取り組む活動だったので上手くいくのか不安もありましたが、電子黒板とワークシートに流れや表現を提示することで、生徒のミニディベートに対する理解と把握もスムーズに行えました。４ラウンド実施することができ、生徒も随分と慣れて、４ラウンド目はメモ書きなしでディベートに取り組ませ、「相手の意見を正確に聞き取り、自分の意見を主張する」というミニディベートのねらいも達成することができました。

指導と評価の一体を大切にしたいと考え、次の授業では譲歩の表現を適切に使用して自分の意見を主張することができるかを評価する Performance Test を実施しました。教師と１対１で向き合って座りスピーキングを披露するというものです。研究授業とは異なるトピック"Which is a better way to contact your friend who lives far away, emails or letters?"について教師が意見を言い、それに対して相手の意見を尊重しながら自分の意見を主張することができるかという観点で、ルーブリックを作成し評価を行いました。多少文法や語彙のミスはありましたが、生徒全員が譲歩の表現を適切に使用することができ、研究授業の目標を達成することができたと考えています。

お二人ともお忙しい中、本当にお疲れ様でした。今回の研究授業の学習指導案は「研究紀要」にも掲載されるとのことですので、ぜひご覧ください！

次に、検証授業の中から、代表して3名の先生方（保健体育科・国語科・理科）の授業実践をご報告します。

保健体育科

Q. 授業の概要を教えてください。

１年６・７組女子の体育で、単元：ダンスの「モチーフとモチーフの変化のさせ方」についての授業でした。

導入ではモチーフの説明として「その状況や心情を最も簡単に、最も伝わりやすく表している表現」であることを伝え、教師自身が「涙を拭う」動きと「汗を拭う」動きを例示し、同じような動きでもモチーフがしっかりしていれば表現が伝わることを示しました。

今回は即興の１時間完結授業とし、あえて考える時間を与えすぎないようにしました。「掃除」をテーマにペアでモチーフを作り、４つの変化を加え、最後は発表を行いました。「掃除」というテーマの下でもモチーフ（表現方法）は様々であり、雑巾がけ、箒、ブラシなど、モチーフによって動きは全く異なります。簡単な動きを大きく魅せて伝える、表情豊かに伝えるなど、ポイントを伝えながら動きをつないでいきます。生徒は助言後すぐに身体を動かしながら確認しており、早く試してみたいという意欲が感じられました。

最後は、代表ペアが集まって発表しましたが、同じ「掃除」というテーマの作品でもペアごとにモチーフが違うため同じ動きは一切なく、バラエティに富んだ「掃除」をテーマにした創作ダンスが完成しました。

Q. 今回の「深い学び」に導くための問いはどのようなものでしたか。

体育、特にダンスの動きづくりは、それ自体が「問い」であり、「深い学び」であったかどうかは学んだ後から気付くものだと思っています。自分の頭で考えたことをペアで持ち寄って、実際に身体を用いて表現してみたり、音に合わせてみたりしながら、相手により伝わる表現方法を探り、またその過程を通して自分も相手の表情や仕草から心情や状況を読み取る力を身に付けていけるかもしれません。

Q.授業を終えてみてどうでしたか。

１年６・７組の生徒たちはダンスの授業に積極的に取り組む姿勢が見られ、恥ずかしがることなく体を使って表現できる生徒が多いため、１コマと言う限られた時間の中でも試行錯誤を繰り返しながら体で表現しようと試みていました。これからも自分を表現することを恐れず、また相手を受け容れる広い心をもって、学校生活を送ってほしいと思います。

国語科

Q. 授業の概要を教えてください。

１年１組の現代の国語の授業において、「映像文化の変貌」（松浦寿輝）を教材としました。授業では、新たな視点を獲得できるような問いを設定して、「複数の視点から注意深く吟味し、論理的に分析する力（クリティカル・シンキング）」を養わせることを目標とし、特に「複数の視点」ということに関して、生徒同士の対話を取り入れることにしました。こうすることで、筆者の主張を多面的に捉えやすくするためです。また、その生徒同士の対話や作業において、Meta 文字を活用して、お互いの作業を視覚的にわかりやすくしました。

Q. 今回の「深い学び」に導くための問いはどのようなものでしたか。

最後の一文「豊かなイメージと貧しいイメージとを選り分ける感受性を鋭く研ぎ澄ましてゆくことが、これからますます必要になってくるはずだ。」の後には、どのような内容を補足すればよいでしょうか。

「学ばせ方改革通信　第5号　No.2」

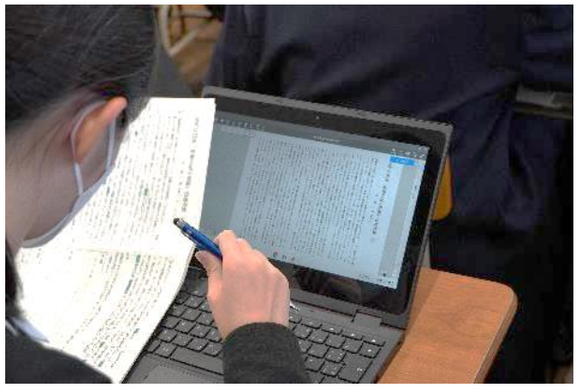
令和４年１２月２２日発行
学ばせ方改革委員会

Q.授業を終えてみてどうでしたか。

今回設定したテーマは、複数の視点から本文を吟味する力を養うための問いを設定すること、その問いを考える上での道具としてのMeta 文字の活用法を探ることでした。

そこで、おおかた本文の読み取りが終わった時点で、「本文を読んで、違和感を覚えるところ」を見つけさせ、生徒の意見の中から、本文の読み取りを深めるきっかけになりそうなものを選び、それを問いにしました。これは、小・中学校で行われている生徒自身が学習課題を設定するという活動によく似ていて、生徒が興味を持って取り組むことができると感じました。

また、Meta 文字の活用については、生徒が自分の考えの根拠として本文を挙げるときに、各自のChromebook の画面に本文が示されるので、根拠を把握しやすいという利点があると思いました。



理科（物理）

Q. 授業の概要を教えてください。

２年７組の理数物理の授業で、「２体問題」という入試頻出のテーマでの問題演習です。解法が複数存在する中で、よりシンプルに解くにはどの解法を選択するべきかを考えるのに良い題材となります。

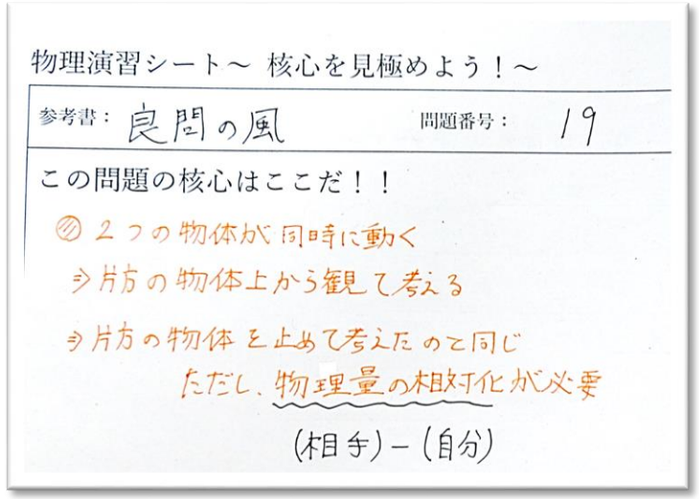
演習をする時は、「１題１題の演習問題をただ解くのではなく、出題の意図を考えながら解く」ことを意識させ、質の高い演習を自分たちの力でできるような生徒を育てることを目指しています。

Q. 今回の「深い学び」に導くための問いはどのようなものでしたか。

「出題者はどのようなことを学ばせたくてこの問題を作ったのか？（出題の意図は何か？）」グループのメンバーとの議論を通して考えてください。

Q.授業を終えてみてどうでしたか。

グループ形式で演習を繰り返してきた結果、グループ内での議論は活発に行われるようになりました。教員が考えた出題者の意図に沿った解法以外の別解を示してくる生徒も出てきています。一方で、レポート内に出題者の意図をまとめる作業に関しては、見やすい形にまとめきれるレベルには達していないのが現状です。「１題１題の演習問題をただ解くのではなく、出題の意図を考えながら解く」ことは質の高い学習に繋がると考えます。今後も指導法を改善しつつ継続していきたいです。



物理演習シート～ 核心を見極めよう！～

参考書：良問の風　　問題番号：19

この問題の核心はここだ！！

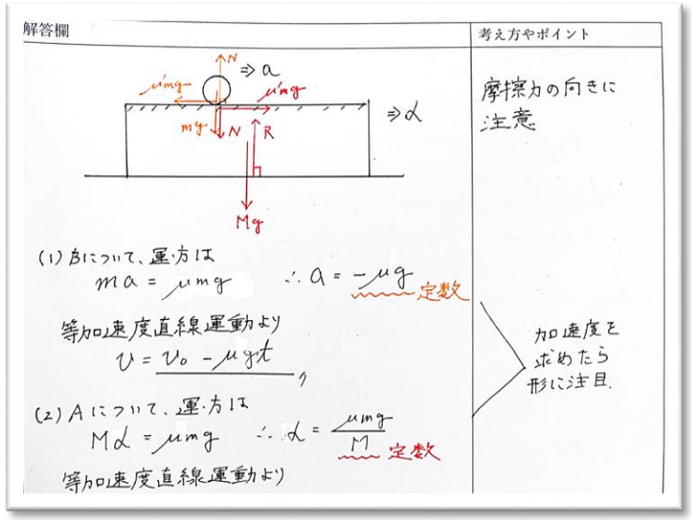
◎ 2つの物体が同時に動く

⇒片方の物体上から観て考える

⇒片方の物体を止めて考えたのと同じ

ただし、物理量の相対化が必要

(相手)－(自分)



解答欄

(1) Bについて、運動方程式は

$ma = \mu mg$　　$\therefore a = -\mu g$ 定数

等加速度直線運動より

$v = v_0 - \mu g t$

(2) Aについて、運動方程式は

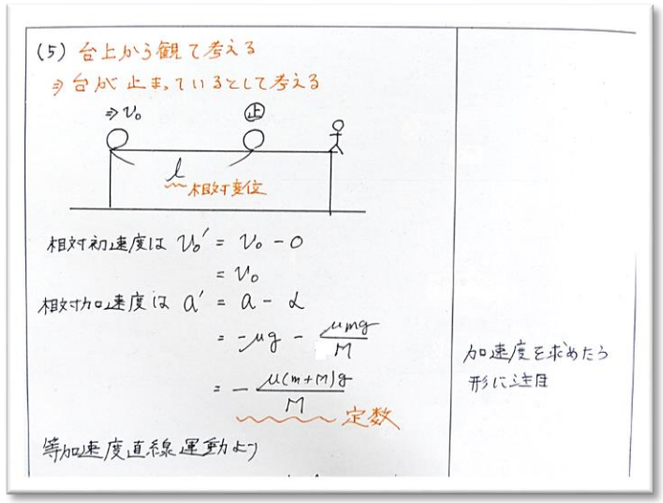
$M\alpha = \mu mg$　　$\therefore \alpha = \frac{\mu mg}{M}$ 定数

等加速度直線運動より

考え方やポイント

摩擦力の向きに注意

加速度を求めたら形に注目.



(5) 台上から観て考える

⇒台が止まっているとして考える

相対初速度は $v_0' = v_0 - 0$

$= v_0$

相対加速度は $a' = a - \alpha$

$= -\mu g - \frac{\mu mg}{M}$

$= -\frac{\mu(m+M)g}{M}$ 定数

等加速度直線運動より

加速度を求めたら形に注目

３名の先生方、お忙しい中、取材へのご協力、本当にありがとうございました。

今年度は全ての先生方に、教科の枠を越えて授業を参観していただくようお願いをしておりました。授業参観を通して、先生方はどのようなことにお気づきになられましたか？ぜひ、その気づきを教科内で共有していただけるとありがたいです。

さて、最後になりますが、この相互授業参観期間中、一番多く授業を参観していただきました教頭先生に、ご助言を賜りましたので、ここにご紹介したいと思います。

相互授業参観期間に、生徒が学習する様子を確認したいと思い、多くの先生にお願いして授業を見学させていただきました。その節はありがとうございました。今年度の深い学びに導くための問いというテーマ設定に沿って拙意を述べます。

まず、「深い学び」については、文部科学省視学委員であられた田村学氏の著書に、「『深い学び』とは、『知識・技能』が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうこと」と説明されています。

演習やドリルなどを繰り返すことによる記憶中心の学習や自分で目標を決め、優先順位を自分で考えて計画を立て、進捗状況を管理しながら学ぶ計画的学習よりも、新しい知識を既知の知識や他分野の知識、情報、体験などに結び付ける関連付ける学習の方が、問題が難しいほど正答率が上がるというデータが、2016年にOECDによって報告されています。それぞれの学習方法を否定するのではなく、有機的に組み合わせた指導方法が効果的であると当時の教育・スキル局長がインタビューで話されています。

このことから、生徒にとって深い学びとなるための問いについて、正解としての答えを、一言で求めるような問い（閉ざされた問い；closed question）では、知識・技能が関連付くことはなく、「どうだった」「どうして」「どういうこと」という問い（開かれた問い；open question）が、生徒の知識と知識を関連付け、結び付けて、構造化した知識を生み出すことにつながると考えます。授業を見学させていただいたとき、班別学習の際に感じたことですが、この開かれた問いは、教師から生徒への発問だけではなく、生徒同士の活動の中でも促す必要があると感じました。相手の発言に対し開かれた問いを投げかけ、相手の発言に興味を示すような聴く側の姿勢や態度の指導をすることにより、さらに発言の連鎖が生まれ学習が活性化するだろうと思います。さらにこのような習慣が身に付くことで、生徒自身の中での開かれた問い、既知の知識・情報の関連付け、学習、深い学びという一連の個人内での思考により、学習効果が高まることも期待できると思いました。また、各教科・科目の既習事項を関連付けた授業展開（教科等横断的な授業展開）も、深い学びに焦点を合わせた学習の際には必要であると感じます。そのためには、データや情報交換を通じて各教科・科目の学習内容を共有することが必要です。生徒が学習したことが、各教科・科目というブロックではなく、頭の中で互いに関連し合い、活用できるような指導や支援がさらに深い学びを生み出すのではないでしょうか。

立命館アジア太平洋大学の出口治明学長は、人が成長するには「人、本、旅」が大切だとよく仰います。人と出会い、本を読み、様々なところに出かけアイデアを得ることで新しい発想が身に付くという意味だそうです。可能な限り他の先生の授業（最近ではウェブでもたくさん見ることができますが）を互いに参加し合うことで授業や業務のヒントを互いに得ることができればと思います。

教頭先生、貴重なご意見ありがとうございました。更なる「深い学び」に向けて皆さん、頑張っていきましょう！

次回は3学期発行予定です。取材に協力していただける先生、情報を提供していただける先生がいらっしゃいましたら、ぜひ委員にお声かけください！